

## 令和4年度 上伊那圏域地域自立支援協議会議事録

会 議	名 称	第2回 重心・要医療的ケア部会/ 療育等連絡会合同部会	参 加 者 数	64  人	会 場	ZoomによるWeb会議
	日 時	令和 4 年 10 月 20 日 ( 木 ) 16:00 ~ 18:15				
主 テ ー マ	<p>1 上伊那圏域の医療的ケア児等の支援体制について</p> <p>①市町村の聞き取りの結果報告</p> <p>②伊那市支援体制の発表 伊那市児童発達支援センター小鳩園 作業療法士・相談支援専門員 町田 恵子氏</p> <p>③意見交換</p> <p>④スーパーバイズ 長野県医療的ケア児等支援センター 副センター長 亀井 智泉 氏</p> <p>2 その他</p>					
二	<p>①市町村の聞き取りの結果報告（上伊那圏域の課題の共有）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・医療連携について</li> <li>・保育園・学校に移行後、市町村保健師等の関わりが薄くなりやすい。</li> <li>・今後、地域の保育園、学校に入学希望者が増えると想定される。受入れの際の困難さも相談のニーズとして出てくる。</li> <li>・市町村は全体を見ながら関われる人がいない。ケースが少なく、相談者の力量や相談にも限界がある。支援の積み上げができない。</li> <li>・福祉サービスに繋がらない場合、親の伴走者が居ない場合が多い。コロナの影響でサービスを利用できない状態が続くと相談支援専門員も切れやすい。</li> </ul> <p>伊那養護学校では、特定の相談支援専門員に依頼している。サービスに繋がらないこともあり報酬がない場合もある。</p> <p>②伊那市より支援体制の発表</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ケースが少なく医ケア児に関わったことのない保健師が多い。</li> <li>・中途障がい医療的ケアとなった児などを、どこで把握していくのか難しい。</li> <li>・過去に相談支援専門員が不在となったケースは保健師が対応した。しかし、医療・保育・福祉・教育等の関係者が多く、コーディネートが大変だった。</li> <li>・小鳩園のセンターとしての機能の中に、「医療的ケア児等コーディネーター配置」は必要と考えている。</li> </ul> <p>伊那市として、どこにどんな人材を配置したらいいか考えていく必要がある。</p> <p>③意見交換</p> <p><b>【医療連携について】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子ども病院より、地域の基幹病院(伊那中央病院)に緊急時の対応や地域へ繋がっていく用をお願いしている(他圏域も同様)。</li> <li>・伊那中央病院より、保健師が情報が欲しい場合と、医療側が繋がった方がよいと思う場合とずれがあると思う。要望があれば声をかけて頂き、途中から医療ケアが必要になった時も、情報共有が不十分なのかなと思う。体調の変化がある時等、心がけてはいきたいが、地域の方から病院に連絡頂けるとありがたい。</li> <li>・子ども病院で専門的な治療を受けている場合、日常生活上の指示等は伊那中央では難しいところがある。どうしても子ども病院に相談しなければならなくなる。</li> </ul> <p>⇒子ども病院より、当院では治療のステップの踏み方、成長・発達段階、年齢など様々な要素が絡んでくるので、どこをどのようにお願いしていくかは他の医療機関と情報共有していかなければいけないと思っている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・信大病院三代澤Drより、信大から伊那中央病院を経由して地域に戻ることが多いと思う。</li> <li>・病院の外來だと困りごとがよくわからないことがある。地域を實際廻って様子を見る医師がいるといいと思う。現在、そういう役割の仕事はなのでボランティアになってしまうが、地域の中核病院の医師が、仕事の一貫として施設や行政の方達と話せる状況になるといい。もし、こういうことが始まれば実践した中で助言等できるかもしれない。このように、情報を取りに行くシステムがないと難しいと思う。伊那中央病院の意見を聞きたい。</li> </ul> <p>⇒伊那中央病院徳高さんより、本日医師が欠席している。私も専門看護師になって地域に出ることが大切だと思うようになってきた。地域を知らない指示書についても現場で使える指示書にはならないのだと思う。当院の小児科の医師たちも乳幼児健診に地域に出かけたり、伊那養護学校の学校医もしている。機会をつかんで地域に出かけると上伊那の連携がよりスムーズになっていくのかなと思っている。</p> <p><b>【各市町村より】</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・突然、医療的ケア児が保育園や学校に入学するといったケースも出てきている。今後の見通しや学校の受入れや環境調整等について市町村内で困り感や大変さも出てきている。保健師は乳幼児から関わっているが、どうしても係や課があるので年齢があがるにつれて関係が薄くなる。ケースも少なく力量形成や全体をみていくことが出来ない状況がある。課で医ケア児の把握はできても制度の隙間に入るのは難しい等意見があった。</li> </ul> <p>⇒(県)亀井さんより、市町村から県のセンターへ相談いただいてもいいが、圏域のことはまず圏域内で相談できる体制が必要と思う。上伊那相談支援専門員の遠藤さんがよくわかっている。圏域の中でも困ったら県のセンターへ相談できるしくみが必要だと思う。</p> <p><b>【相談支援専門員・遠藤さんより】</b></p> <p>斎藤診療所には、往診、訪看、相談支援専門員と家庭の事情を知る仕組みがある。三代澤先生の地域のどこで誰が困っているのかをDrが問うのはいいと思った。</p> <p>市町村に相談に行った親から、「管轄ではない」と断られたが次の窓口も教えてもらえなかったのだからこちらに相談があった。市町村からの相談も断らず受けている。</p>					

親は仕事や子育て等事情があって、時間的にも市町村に相談するのは敷居が高いように思う。まずは親の話を聞き、次どうする？という中で親と役割分担をして動いている。

相談支援専門員として相談は断らない。時間がかかってもできるだけサービスに繋げている。

全領域に関われるのが相談支援専門員なのかなと感じている。

【伊那養護学校・亀井先生より】

教員は福祉のことはわからない。学校が遠藤さんに相談しているケースはある。遠藤さんのようにサービスをうまく組み合わせて支援してくれる方がいるとありがたい。

学校の持っている情報は限られており、相談支援専門員のように小さな頃から関係が出来ていると、学校では気が付かない視点があり遠藤さんに頼っている現状がある。リアルタイムに情報を持っている方達とチームが作れるといいと思う。

④長野県医療的ケア児等支援センター 亀井さんよりスーパーバイズ

・行政が話し合いをして具体的な体制をつくるのは難しいと思う。

・行政はテーマコミュニティで縦割りの仕組みで動いているので仕方がない。地域は地域のコミュニティで動くので行政の窓口では全人的・包括的な相談はできない。

・Q-SACCSのインターフェイスにたくさんの部署や担当者が書いてあるが、行政の方が直接的にインターフェイスになれることはおそらくない。

・誰がつなぎ手になるのかについて、命を守るのは医療者なので、訪問看護が重要な役割になってくる。そして、伊那中央病院、学校看護師、事業所看護師が児の命を守る体制を作っていくので、看護師をもっと頼れる圏域になってほしい。そうしないと、「何かあったら遠藤さん」という体制は変わらない。現在医ケアCo的な役割を担っているのが遠藤さんなので、今後ますます仕事が集中してしまう。地域の看護師声をもっと拾ってほしい。

・行政の医療職の保健師には、もっとケースマネジメントの力をつけてほしい。

・全人的・包括的というと、子どもの発育・発達がわからなければ子育てに寄り添うことはできない。子育て世代包括支援センターもあるし、上那はネオボラが定着しやすい土地柄でもあり、母子に寄り添う文化があると思う。保健師の持っているケースマネジメントの力をもっと活かせるはず。行政職はアウトリーチしたくても窓口で待つしかない。

本当の相談は困りごとが言語化される前にアウトリーチして拾っていく。それが保健師の本来の公衆衛生の役割。

保健師がもっと力をつけてアウトリーチすることが一つ。そして保健師だけでなく、保健師が拾ったニーズを訪看、遠藤さん、事業所の看護師その他の支援者と共有していくことが大事だと思う。

・県でも医ケア児支援の研修をやっている。保健師も積極的に受講してほしい。また、受講したもの同士交流を深めてほしい。看護師交流会の機会を活かしていったらいいと思う。

来年は医ケア児Coの研修を行う予定。今年度は県600人の児に対してCoが200人だったので、力をつけてもらうために研修をやっている。

保健師でやりたい方は来年積極的に受講してほしい。

・養護学校は本来親の伴走者ではない。今は先生方が担わざるをえない状況なのだと思う。教員が教員でいられるために、まず命を支えるための看護職同士の横の連携が重要。

・自治体で何とかしなければと思わなくてよい。出来なくて当たり前なので、域で何ができるか等支援の連携を作っていく必要がある。連携していくためにはチームリーダーが必要。上伊那の現状では遠藤さんではないかと思う。そして、医療に関しては伊那中央病院、教育に関しては伊那養護学校がセンター機能をもつのでそれぞれ役割が担っていければ良いと思う。

【伊那保健福祉事務所・和田さんより】

・医ケア児に関して、昨年の部会では、子ども病院から地域の保健師へできるだけ情報をもらうようになったと思う。健診等を通して保健師が情報を得られる状況なので、関りが薄くなっていても気にかけてほしい。その中で保健師が支援の組み立てをしないといけないときに、こんな役割の人がいたらいいなというのが医ケアCoなのかなと思う。

国から役割等示されていない中なので、まずは保健師が気をつけながら動行けていく。そして遠藤さんのような役割の方がCoとして配置出来、一緒に支援していける流れが出来るといいので、今後の保健師の活躍に期待したいと思う。

まとめ

医ケア児の支援体制について、上伊那圏域の課題や自治体の支援体制の限界などを共有した。今後圏域の支援体制について検討していく。

次回

(記録者)